10 月 2 日のメッセージ

聖書：ヘブライ人への手紙　9： 23 – 28

「救いをもたらすために」

「惜しまず献げること」(コリントの信徒への手紙二 9:6)の大切さは身をもって知っています。痛いほどわかっています。けれども、それでもなお自分中心になってしまうのが人間というものでしょう。

救い主であるイエスを目の前にしながら、なおユダは裏切りを企ててしまいます(「十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。」マルコによる福音書 14:10)。必ず与えられるとの約束よりも、目の前の金品に揺らいでしまうのです(「彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。」マルコによる福音書 14:11)。

もし、私たちの救いが都度与えられるものだとしたら、私たちはこれまで何度救われてきたことでしょう。もはや、数えることさえ難しいくらい、私たちは助けられ、支えられ、救われてきました。その度ごとにイエスが十字架につけられなければならないとすれば、イエスは今も十字架につけられたままになってしまうでしょう。

イスラエルの民は、主に救われた経験を毎年更新してきました。主の過越を記念して羊を屠り、その血を柱に塗って過越を想起してきました。感謝を献げてきました(「さあ、家族ごとに羊を取り、過越の犠牲を屠りなさい。そして、一束のヒソプを取り、鉢の中の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱に鉢の中の血を塗りなさい。……主が……その入り口を過ぎ越される。……あなたたちはこのことを、……永遠に守らねばならない。』」出エジプト記 12:21-24)。

しかし今、神は新たな犠牲は必要ないと言われます(「また、キリストがそうなさったのは、大祭司が年ごとに自分のものでない血を携えて聖所に入るように、度々御自身をお献げになるためではありません。」ヘブライ人への手紙 9:25)。イエス・キリストのただ一度の十字架と復活によって、全ての者は救いへと招き入れられました(「世の終わりにただ一度、御自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために、現れてくださいました。」ヘブライ人への手紙 9:26)。もちろん、「だから安心して道を踏み外せ」という訳ではありません。「仮に道を踏み外したとしても戻る場所がある」のです。その喜びによって、私たちは安心してそれぞれの道を歩むことができるのです。

「国々に主の栄光を語り伝えよ」(詩編 96:3)。イスラエルの民はその言葉通り、毎年、過越の食事を通して主の栄光を証ししてきました。大祭司は犠牲の血を携えて、聖所で神を賛美してきました。

今、その意味するところは変えられます。イエスはご自身をただ一度献げられました。それによって、救いの約束は永遠に更新されました。そして、過越の食事は最後の晩餐へと変えられます。都度の犠牲ではなく、ただ一度の犠牲を記念する食事へと変えられたのです(「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、……『取りなさい。これはわたしの体である。』また、杯を取り、……『これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。』」マルコによる福音書 14:22-24)。

十字架のイエスは復活され、天に昇られた後、再び地上へ来られると約束されました(「イエスが離れ去って行かれるとき、……『……あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。』」使徒言行録 1:10-11)。

「御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。」(ヘブライ人への手紙 9:28)

その日を指折り数えて待ちながら、私たちは今日も主の聖餐に与ります。ただ一度の苦しみを想起するために、そして、救いの約束が確実であることを確認するために共に食卓を囲むのです。